

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	夏目漱石『心』英訳の状況 —Meredith McKinneyの翻訳をめぐる—
Author(s)	徳永光展
Citation	福岡工業大学研究論集 第49巻 第1号 (通巻75号) P27-P33
Issue Date	2016-9
URI	http://hdl.handle.net/11478/549
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

夏目漱石『心』英訳の状況

—Meredith McKinney の翻訳をめぐる—

徳 永 光 展 (社会環境学科)

Difficulties in Translating Natsume Sōseki's *Kokoro* into English: A Look at the Translation by Meredith McKinney

Mitsuhiro TOKUNAGA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

Three English translations of Natsume Sōseki's *Kokoro*, written in 1914, have been published: the first by Ineko Sato in 1941, a second by Edwin McClellan in 1957, and the most recent by Meredith McKinney in 2010. This paper looks at McKinney's translation and discusses how sentences that contain cultural background unique to Japan are treated in translation. Different communication styles resulting from differences in the cultural background between the Japanese and English languages are apparent in a variety of situations, but this paper focuses specifically on passages where a nuance in the Japanese original is translated into English in an entirely different form, and explores the background of these cases.

Key words: *Natsume Sōseki, Kokoro, English translation, Meredith McKinney, comparative Japanese language and culture studies*

1. 問題の所在

夏目漱石の『心』には3種類の英訳がある。1941年に最初の翻訳が近藤(旧姓・佐藤)いね子によってなされ、日本で出版された。その後、アメリカのエドウィン・マックレランが1957年に新訳を発表している。この翻訳は英語のネイティブ・スピーカーとしては初めてのものであった。それ以来、マックレラン版が英語圏で権威を持ったせいも、新たな翻訳は出現しなかった。

この翻訳は、現在でも広く読まれているが、2010年になってオーストラリアのメレディス・マッキニーが新訳を発表した。このマッキニーによる最新訳に対する評価は今後待たれる状況にあるので、本稿では最新訳を取り上げ、原文との照合を行いつつ、翻訳研究へと発展させたい。

ところで、マッキニー訳は Penguin Classics シリーズの1冊として出版されている。同シリーズには『心』以外にも『三四郎』の改訳版と『草枕』の新訳が入っており、夏目漱石の英語圏における再評価を促す意向を編集者が持つ

ていると考えられる。21世紀に入って1300点余りの古典を出版する大手へと成長を続けるペンギン・クラシックスに漱石作品が入ったということは、漱石が世界の古典としての位置を確立したと見てもよいであろう。ちなみに、このシリーズの『三四郎』は旧訳を果たしたジェイ・ルービンが再び手掛けているが、『草枕』は『心』に同じくマッキニーによって果たされたのである。よって、マッキニーは『草枕』の翻訳者、アラン・ターニーをも乗り越えた存在となったと言ってもよい。ターニーは、『坊っちゃん』の英語圏における最初の翻訳者としても名高い。『坊っちゃん』も現在、佐々木梅治、アラン・ターニー、ジョエル・コーンそれぞれによる計3種類の英訳が書店流通しており、英語文体比較研究の素材を提供している。

以上のような出版状況を勘案した時、マッキニーは21世紀の英語圏における漱石文学の再評価者と位置付けることができるであろう。

2. 翻訳者

メレディス・マッキニー (Meredith McKinney, 1950～)
はキャンベラにあるオーストラリア国立大学にて学び、中

世日本文学研究により博士号を取得し、現在は同大学の日本センターで教鞭を取っている。彼女は京都大学文学部に留学し、神戸市外国語大学にて外国人教師として勤務するなど、20年以上日本で教授活動を行い、現在はニューサウスウェールズ州のブライドウッド近郊に住んでいる。翻訳にはペンギン・クラシックス所収のものとして漱石の『草枕』、清少納言『枕草子』、吉田兼好『徒然草』、鴨長明『方丈記』、また他には『西行物語』の翻訳などの業績がある。

3. Kokoro というタイトル

近藤いね子はこの翻訳に対して“Kokoro”というタイトルを採用した。訳出不能な象徴的意味の拡がりをもった「心」というタイトルに音訳を当てはめたのである。マックレランが近藤訳を参照したかどうかは不明であるが、夏目漱石が作品のタイトルを決定するに際して、師であったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本論とでも呼ぶべき『心——日本の内面生活がこだまする暗示的緒編——』（1896年）にヒントを得た可能性を視野に入れつつ、マックレランはハーンの自著解説が“Kokoro”という日本語の説明として最もふさわしいと序文で述べている。では、ハーンは「心」という言葉に如何なる説明を加えたか。

この巻を構成する諸編は日本の外面生活よりもむしろ内面生活を扱っている。——それだから「心」Kokoro (heart) という標題の下にまとめた。右に掲げた漢字で書かれるこの言葉は、「心情」heart だけでなく情緒的な意味における「心意」mind をも意味し、「精神」spirit, 「勇気」courage, 「決心」resolve, 「感情」sentiment, 「情愛」affection をも意味する。そして「内なる意味」inner meaning をも意味する。——ちょうど英語で“the heart of things” というと「物事の核心」という意味になるのと同じである。

このような意味の拡がりを持つ「心」という単語は、そのままローマ字表記すべきであるとマックレランは考えたのである。それでは、マックレランが“Kokoro”と原題を残した作品の新訳を成し遂げるに際して、マッキニーは書名に関してどのようにかんがえたのであろうか。マッキニーは翻訳の冒頭に付した序文の最後でタイトルについて (About the Title) として以下のような注記を加えている。

Kokoro という小説のタイトルは複雑で重要な単語である。おそらくは純粹に知的で、人間の感情を欠いた仕事からは異なった“the thinking and feeling heart” (考え、感じる心) とすれば、最もよく説明できる。なぜならば、人の Kokoro は感情としてよく思考されるのであり、heart とは時として不適切な翻訳だからである。しかしながら、Kokoro という概念は小説全体を

貫いて浸透しているモチーフであるため、私は heart という一語をこれで表現し、翻訳においてその存在につき出来る限り保護する立場を取っている。タイトルに関してはオリジナルの単語を残すのが最も適切と考えた。

こうして、マッキニーの新訳においても、書名は“Kokoro”となったのである。

4. 本文に残存するローマ字表記

タイトルとなった Kokoro (心) 以外にも、本文中には日本語がそのままローマ字表記化されている単語がしばしば登場する。人名、地名などは勿論であるが、日本独自の文化的背景を持った単語についてもそのままローマ字表記されている場合がある。以下、実際に列記し、その後に日本語表現を並べてみれば以下ようになるであろう。

Sensei (先生), Kamakura (鎌倉), Chûgoku (中国), sen (銭), Tokyo (東京), Hasé (長谷), kimono (着物), Yuigahama (由井ヶ浜), Zôshigaya (雑司ヶ谷), Shizu (静), Hakoné (箱根), Nikko (日光), sake (酒), Shinbashi (新橋), Yokohama (横浜), Ichigaya (市ヶ谷), Edo (江戸), Tottori (鳥取), Niigata (新潟), Ueno (上野), Uguisudani (鶯谷), Kyushu (九州), go (碁), shôgi (将棋), kotatsu (炬燵), Kagoshima (鹿児島), kirishima (霧島), Maruzen (丸善), Meiji (明治), obi (帯), tsutsukubôshi (つく／＼法師), Nogi (乃木), Saku-san (作さん), Seki (関), Omitsu (御光), Hongô (本郷), Koishikawa (小石川), Denzûin (伝通院), koto (琴), Ojôsan (御嬢さん), Okusan (奥さん), Nezu (根津), Nihonbashi (日本橋), Kiharadana (木原棚), Hongan (本願), Komagome (駒込), Kannon (観音), Koran (コーラン), samurai (侍), Kanda (神田), Ochanomizu (御茶ノ水), Tomizaka (富坂), Bôshû (房州), Hota (保田), Tomiura (富浦), Nako (奈古), Chôshi (銚子), Kominato (小湊), Nichiren (日蓮), Tanjôji (誕生寺), Ryôkoku (両国), Genkaku (厳格), Yanagi-chô (柳町), Masago-chô (真砂町), Hyakunin issû (百人一首), Tatsuoka-chô (竜岡町), Ikenohata (池之端), Suidô (水道), Sarugaku-chô (猿楽町), Shinbô-chô (神保町), Ogawamachi (小川町), Mansei (万世), Kanda Myôjin (神田明神), Kikusaka (菊坂), Satsuma (薩摩), Watanabe Kazan (渡辺華山), Kantan (邯鄲)

これらの中には、説明を加えた方が読者に対して親切であるものも少なくはない。マッキニーは Kokoro という小説のタイトル以外にも所々で簡潔な注を施しているが、英

訳の立場から見た場合には適当な処置であると言ってよいと見られる。日本独自の文化的背景に全く知識のない読者を作品世界に誘うのに、注釈は一役買っていると見られるのである。よって、次章ではその様子について概観したい。

5. 注釈 (Notes) について

注釈は巻末にまとめて記載されている。では、具体的に見てみることにしよう。英訳に続いて()に原文を示し、その後に注釈の和訳を掲げる。

Chapter 1. Kamakura (鎌倉)：かつては日本の中心だったが、近年では東京に近い夏の避暑地としての地位を築いており、行楽客は魅力的な余暇を海水浴で満足させられた。

Chapter 60. perform the basic exchange of marriage cups (出来るなら今のうちに祝言の盃は済ませて置きたい)：婚礼は正式には同じ盃で酒を飲む行為を含む簡素な儀式として生じた。

Chapter 64. I happened to go west down the slope of Hongô-Hill, and climb Koishikawa toward Denzûin Temple. (本郷台を西へ下りて小石川の坂を真直に伝通院の方へ上がりました)：現在の東京都文京区で東京大学が所在する。伝通院は浄土宗の寺院である。

Chapter 64. the Sino-Japanese War (日清戦争)：1894-95年。

Chapter 65. koto (琴)：チターのような日本の楽器で13の弦を持つ。

Chapter 65. Ojôsan (御嬢さん)：娘は未婚女性を表すこの丁寧な敬称で初めから終わりまで呼ばれている。

Chapter 72: adopt a son-in-law as a member of their own household, or let her daughter marry out as a bride (嫁に遣るか、婿を取るか)：妻は伝統的には夫の家族として登記されるが、妻の家族へ夫を正式に養子縁組するのは一般的ではなく、そのような家族は相続を受け負う息子がいない場合であった。

Chapter 74. the Komagome area (駒込)：現在の東京都文京区。

Chapter 81. Swedenborg (シユエデンボルグ)：エマニュエル・シェーデンボルグ (1688-1722年)、スウェーデンの哲学者・神秘主義者。

Chapter 81. the Bôshû Peninsula (房州)：現在の千葉県南部。

Chapter 84. Chôshi (銚子)：現在の千葉県にある漁港の町。

Chapter 84. Nichiren (日蓮)：日蓮 (1222-1282年) は日蓮宗の始祖で法華経の中では最も過激な宗派に属する。

Chapter 85. the Ryôkoku district (両国)：東京の両国橋周辺を中心とした繁華街。

Chapter 87. past the fierce Enma image that stands in Genkaku Temple (茆蕪閻魔)：厳格寺は東京の小石川区にあるが、漱石が奥さんの家が建っている場所として想像した場所に近い。閻魔は死者達の王国における支配者である。

Chapter 88. Masago-chô (真砂町)：現在の文京区で、東京大学にも近い。

Chapter 89. the New Year game of poem cards (歌留多)：伝統的なゲームで、有名な韻文の下2句を含んだカードが面になっており、参加者は歌の前半部を含んだ適当なカードをそれぞれ組み合わせなければならない。その歌は百人一首、つまり百人の歌人からそれぞれ一首を取った歌選集に含まれ、藤原定家(1162-1241年)が撰者となったものを通常は指す。

Chapter 100. through three city wards (此三区に跨がつて)：小石川区、神田区と本郷区。

Chapter 102. I had laid out my bedding to face the opposite direction (西枕に床を敷いた)：西向きに寝ることは不吉とみなされる。というのも、そこが死界だからである。

Chapter 109. Emperor Meiji passed away (明治天皇が崩御になりました)：序文参照。

Chapter 110. General Nogi (乃木大将)：序文参照。

Chapter 110. the Satsuma Rebellion (西南戦争)：1877年に起った政府による戦争で、天皇を支持する勢力は反乱を起こした薩摩軍と衝突した。政府軍は勝利したが、連隊の司令官・乃木大将は軍の象徴であった軍旗を敵に取られたことに責任を感じていた。

Chapter 110. *Kantan* (邯鄲)：画家であり、学者でもある渡辺華山 (1793-1841年) は、有名な邯鄲を描写した。邯鄲は、中国でそう名乗られる村に住む若者の伝説を生き生きと描く。また、夢が若者にとって一時的な名声や栄光に過ぎないことを示す時には啓発へと到達する。華山はしきたりによる自殺を遂げた。

このような注釈は読者の作品理解を助けるものとなっていよう。鎌倉がリゾート地である事実を知れば、先生や「私」が描かれるこの世界が富裕層の人間によって成り立っている事実がイメージできるし、百人一首の歌留多遊びも注を得てこそ具体的に想像できるはずなのである。

6. イタリック体での表示

本文中には、所々にイタリック体で記された箇所を見出すことができる。マッキニーに対する著者のインタビューによれば、それらは編集者が強調を施した箇所であったとのことである。(2015年6月28日、於・オーストラリア国立大学)

イタリック体による強調には、幾つかの理由が考えられ

る。日本独特の事物をローマ字表記したために、その箇所
に特別な注意を促す意味が込められたもの、固有の強調符
としての機能を果たすものなど、ケース毎に解釈が可能で
あろう。試みに幾つかを例示する。

6.1 日本語ローマ字表記

車で行つても二十銭は取られた。(1章/上1)

A rickshaw ride would cost me a full twenty *sen*.(4)

本文冒頭の箇所、鎌倉の海水浴場に遊びにやってきた
「私」の前に広がっていたのは、豪華な避暑地として当時
既に確立していた町のたたずまいであった。「鎌倉」という
地名には前出のように首都圏からほど近い位置にある高級
リゾート地といった意味が注記されており、作品の幕開け
が華やかな設定となっている事実が読者には強調されてい
る。

引用文の直前には「宿は鎌倉でも辺鄙な方向にあつた。
玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長
い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。」(1章/上1)
という文章が添えられている。換言すれば、鎌倉の賑やか
な箇所にあれば、ハイカラなものに多数出くわすという訳
である。

「私」は「まだ若々しい書生」(1章/上1)、つまり、学
生という設定になっている。学生である以上、鎌倉に泊り
がけで遊びに来ること自体が贅沢であるため、ハイカラな
娯楽を手当たり次第に買うという訳にはいかなかった事情
が容易に想像される。だから、宿泊場所は廉価が予想され
る「辺鄙な場所」にあつたという訳なのであろう。

「車で行つても二十銭は取られた」とは、要するに二十銭
以上が当たり前で高いというニュアンスである。“sen”と記
載しても、この文脈であれば通貨の単位であることは分か
る。“full”という形容詞が添えられることで、「二十銭は十
分に」という意味がうかがいしれよう。ただし、英語圏の
読者にとってこの通貨単位は馴染みがないために、イタ
リック表記がなされたと思われるのである。

なお、これと同様に日本語ローマ字表記でイタリック体
化されている単語には、“shōgi”(将棋)、“kotatsu”(炬燵)、
“kirishima”(霧島)、“obi”(帯)、“tsutsukubōshi”(つく
／＼法師)、“egoist”(イゴイスト)、“koto”(琴)、“Hyakunin
isshū”(百人一首)がある。

6.2 読者に対する注意の喚起

其時たゞ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れ
た人間の一对であるべき筈です」といふ最後の一句で
あつた。(10章/上10)

The only thing that struck me as strange was that final
phrase, *we should be the happiest of couples*.(22)

「最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」という
箇所がイタリック体で強調されている。その直後には、「先
生は何故幸福な人間と云ひ切らないで、あるべき筈である
と断つたのか。私にはそれ丈が不審であつた。ことに其所
へ一種の力を入れた先生の語気が不審であつた。先生は事
実果して幸福なのだろうか、又幸福であるべき筈でありな
がら、それ程幸福でないのだろうか。私は心の中で疑ぐら
ざるを得なかつた。けれども其疑ひは一時限り何処かへ葬
むられて仕舞つた。」(10章/上10)という文章が続く。「あ
るべき筈」という表現は理念的にはそうであっても、実際
には幸福感を得られないでいるというニュアンスを含み
持っている。事実、直後の引用からもうかがい知れるよう
に、「私」は先生が理想的な妻を迎えてもなお自らが幸せで
あるとは言い切れないもどかしさを抱え持っているのでは
ないかという疑いを発せずにはいられないのである。だか
ら、奇妙な表現に対してイタリック体を取ることに
よ、その独特な言い回しに注意を払ってほしいという願いが編
集者には込められていると考えられるのである。

このような形でのイタリック体使用、つまり、言葉その
ものに対して注意を払ってほしいという編集者の願いが込
められた箇所は、以下に見出すことができる。

「かつては其人の前に跪づいたといふ記憶が、今度は其人
の頭の上に足を載せさせやうとする」(15章/上15)が、*The
memory of having sat at someone's feet will later make
you want to trample him underfoot*,(32)、「許くといふ言
葉」(31章/上31)の「許く」が *disclose*(66)、「世間はこん
な場合によく御目出たうと云ひたがるものですね」(32章/
上32)が、*I guess this is the kind of situation in which
people usually congratulate someone*.(68)、「尿毒症といふ
言葉」(34章/上34)の「尿毒症」(*uremia*)、「何つちが先
へ死ぬだらう」(36章/上36)が *Which will die first?*(76)、
「もう大丈夫、御母さんがあんまり仰山過ぎるから不可な
いんだ」(38章/中2)が、*Your mother shouldn't go
exaggerating things*,(81)、「必竟やぐざだから遊んでゐるの
だと結論してゐるらしかつた」(42章/中6)が、*There you
are, he was insinuating, the fellow's worthless, that's why
he's lazing about doing nothing*.(90)、「又例の兄らしい所
が出て来たと思つた」(51章/中15)の「兄らしい所が出て
来た」が *That's just like him*,(108)、「自由が来たから話す。
然し其自由はまた永久に失はれなければならない」(53章/
中17)が、*I am telling you because I am now free to. But
that freedom will soon be lost forever*.(114)、「談判といふ
のは少し不穩当かも知れませんが、話の成行からいふと、
そんな言葉で形容するより外に途のない所へ、自然の調子
が落ちて来たのです」(62章/下8)の「談判」が *negotia-
tions*、「其時私はしきりに人間らしいといふ言葉を使ひま
した」(85章/下31)や「人間らしいといふ抽象的な言葉」
(85章/下31)の「人間らしい」が *human*、「私の相手とい
ふのは御嬢さんではありません。奥さんの事です」(88章/

下34)の「相手」が *her*, 「私の心は半分其自白を聞いてみながら、半分何うしやう／＼といふ念に絶えず搔き乱されてるましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました」(90章/下90)の「何うしやう／＼」が *What shall I do, oh, what shall I do?*, 「要するに私は同じ事を斯うも取り、彼も取りした挙句、漸く此処に落ち付いたものと思って下さい。更に六づかしく云へば、落ち付くなどいふ言葉は、此際決して使はれた義理でなかつたのかも知れません」(93章/下39)の「落ち付く」が *settle*, 「所が「覚悟」といふ彼の言葉を、頭のなかで何遍も咀嚼してゐるうちに、私の得意はだん／＼色を失なつて、仕舞にはぐら／＼揺き始めるやうになりました」(98章/下44), 及び「さうした新らしい光で覚悟の二字を眺め返して見た私は、はつと驚ろきました。」(98章/下44)の「覚悟」が *resolve*, 「「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」といふ感じが私の胸に渦巻いて起りました。」(102章/下48)の「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」が *Though I've won through cunning, the real victory is his* (216), 「さぞKが軽蔑してゐる事だらう」(102章/下48)が *How he must despise me!* (216), 「私はあゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。」(102章/下48)の「あゝ失策つた」と「もう取り返しが付かない」が合体した *Oh god, it's all over* (217), 「私は一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思ひました」(102章/下48)の「助かつた」が *Saved!*, 「私の頭は無意味でも当分さうして動いてゐると私に命令するのです。」(103章/下49)の「当分さうして動いてゐる」が *Pointless though it is, my brain instructed me, for now you must just keep moving.* (218), 「同時にもう何うする事も出来ないのだと思ひました。」(103章/下49)の「何うする事も出来ないのだ」が *There's nothing I can do.* (218), 「さうして私は此質問の裏に、早く御前が殺したと白状してしまへといふ声を聞いたのです。」(105章/下51)の「早く御前が殺したと白状してしまへ」が *Quick, confess that it was you who killed him.* (222), 「私は腹の中で、たゞ自分が悪かつたと繰り返す丈でした。」(105章/下51)の「自分が悪かつたと繰り返す」が *I was to blame, I was to blame* (223), 「理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思ふと益悲しかつたのです。」(107章/下53)の「理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだ」が *But it's within your power to help her understand, I thought, and yet you're too cowardly to do so, and I grew still sadder.* (227), 「さうして其力が私に御前は何をする資格もない男だと抑え付けるやうに云つて聞かせます。」(109章/下55)の「御前は何をする資格もない男だ」が *You have no right,* (230), 「自分で能く知つてゐる癖にと云ひます。」(109章/下55)の「自分で能く知つてゐ

る癖に」が *You know very well why.* (230), となつてゐる箇所である。

7. 形式段落の扱い

本文の行頭が一文字下げになつてゐる箇所を称して形式段落の始まりとここでは言っておきたい。マッキニーは原文の形式段落を厳格に踏襲する方法は採用せず、英文としての仕上がりには意を払つて、文章の構成を考えたものとみられる。

一例を挙げよう。冒頭、形式段落ふたつ目は、英訳では更に3つの段落に分けて訳されているのである。原文、英訳の順に掲げてみよう。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非来いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費やした。所が私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れといふ電報を受け取つた。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にゐる親達に勧めない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかつた。夫で夏休みに当然帰るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うして可い分らなかつた。けれども實際彼の母が病気であるとすれば彼は固より帰るべき筈であつた。それで彼はとう／＼帰る事になつた。折角来た私は一人取り残された。(1章/上1)

I first met Sensei in Kamakura, in the days when I was still a young student. A friend had gone there during summer vacation for sea bathing and urged me to join him, so I set about organizing enough money to cover the trip. This took me two or three days. Less than three days after I arrived, my friend received a sudden telegram from home demanding that he return. His mother was ill, it seemed.

He did not believe it. For some time his parents had been trying to force him into an unwanted marriage. By present-day standards he was far too young for marriage, and besides he did not care for the girl in question. That was why he had chosen not to return home for the vacation, as he normally would have, but to go off to a local seaside resort to enjoy himself.

He showed me the telegram and asked what I thought

he should do. I did not know what to advise. But if his mother really was ill, he clearly should go home, so in the end he decided to leave. Having come to Kamakura to be with my friend, I now found myself alone. (3)

こうして英文における形式段落の変わり目を見てみると、原文では一文として表現されている箇所が新しい形式段落を立てられるまでに様変わりしているのである。「電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた」という一文の箇所は His mother was ill, it seemed. (電報には母が病気だからとあつた) と He did not believe it. (彼はそれを信じなかつた) に分けられている。「けれども」という逆接を表す表現は英文では形式段落の変更という形で処理されているのである。「彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした」という箇所では、英文はもう一度段落を変える。確かに遊んでいるという状況の説明と、それに対する処置は異なる行為である。

英訳はこの二つを明確に分けた。よって、英文では友達が置かれている立場の説明で一段落、友達と「私」のやり取りとその結果に関する説明でさらに一段落という書き分けがなされたことと捉えることができるのである。

これは単なる形式上の差異に止まらず、文章の解釈に踏み込む議論となる。翻訳者が英文としての仕上がりに意を注いだ結果の措置とみてよい。よって、形式段落に関する議論を日英対照で行うと、原典の文章をより多角的に読み取ることができるように思われるのである。

8. 結語

本稿ではマッキニー訳『心』を原典と比較し、形式面で指摘し得る内容に絞って概観してみた。日本文化独特のニュアンスがどこまで翻訳されているかをより深く分析するためには、今一度原典に立ち戻り、本文に潜んでいる微妙な表現を洗い出し、該当箇所の英訳を照らし出す作業が不可欠となるのである。

【付記】

本文の引用は、『漱石全集 第9巻』（岩波書店 1994年9月）、及びに Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Meredith McKinny, Penguin Books Ltd, 2010. による。なお、日本語引用に際しては、ルビを省略した。引用箇所の表示に際しては、新聞連載の回数と単行本として出版された際の三部構成における章立てを併記した『漱石全集 第9巻』の方式を採用し、両者を並べて示すようにした。

本稿は、第2回アジア未来会議（於・ウダヤナ大学大学院棟、インドネシア共和国、2014年8月23日）における口頭発表に基づき、会議の際、参加者に配布された「第2回

アジア未来会議予稿集 USB」（渥美国際交流財団）に訂正・加筆を施したものである。

【参考文献一覧】

- Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Ineko Sato, The Hokuseido Press, 1941.
- Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Edwin McClellan, Henry Regnery Company, 1957.
- Sôseki Natsume, *Kokoro* translated by Meredith McKinny, Penguin Books Ltd, 2010.
- Sôseki Natsume, *The Three-Cornered World* translated by Alan Turney and Peter Owen, Charles E. Tuttle Company, 1965.
- Sôseki Natsume, *Kusamakura* translated by Meredith McKinny, Penguin Books Ltd, 2008.
- Sôseki Natsume, *Sanshirô* translated by Jay Rubin, Penguin Books Ltd, 2009.
- Sôseki Natsume, *Botchan* translated by Umeji Sasaki, Charles E. Tuttle Company, 1968.
- Sôseki Natsume, *Botchan* translated by Alan Turney, Kodansha International Ltd, 1972.
- Sôseki Natsume, *Botchan* translated by Joel Cohn, Kodansha International Ltd, 2005.
- Sôseki Natsume, *Botchan* translated by Joel Cohn, Penguin Books Ltd, 2012.
- McClellan, Edwin (1994). "On Translating Kokoro." *A Symposium on Natsume Sôseki's Kokoro: A Selection from the Proceedings*, Ed. Lien-hsiang Lin. Singapore: Department of Japanese Studies, National University of Singapore.
- エドウィン・マックレラン、山中由里子訳（1992）『「こゝろ」の翻訳について』、平川祐弘・鶴田欣也訳『漱石の「こゝろ」——どう読むか、どう読まれてきたか——』新曜社
- 秋山勇造（1993）『「心」の英訳について』、『人文研究』第115号 神奈川大学人文学会
- 秋山勇造（1995）『「心」の英訳——近藤訳とマックレラン訳——』、秋山勇造『翻訳の地平——翻訳者としての明治の作家——』翰林書房
- 井本美紗緒（1972）『日本文学英訳における日英語の比較 I——Edwin McClellan による夏目漱石作「こころ」の英訳について——』、『福岡女子短大紀要』第5号 福岡女子短期大学
- 大澤吉博（2002）『夏目漱石『心』における非日常性——その構造と文体——』、『比較文学研究』第80号 東大比較文学会／大澤吉博（2010）『言語のあいだを読む——日・英・漢の比較文学——』思文閣出版
- 岡田章子（1978）『「こころ」の英訳をめぐる——McClellan 訳と近藤いね子訳の比較——』、『桃山学院大学総合

- 研究所報」第4巻第1号 桃山学院大学総合研究所
- 川崎謙・鳥井美和・浜部武生・福見克敏（1992）「理科教育の鍵概念「自然」に関する資料——漱石『道草』『こゝろ』に見る自然——」,「岡山大学教育学部研究集録」第90号 岡山大学教育学部
- 小泉八雲, 平川祐弘訳（2016）『心——日本の内面生活がかこだまする暗示的諸編——』河出書房新社
- 近安里（1995）「夏目漱石『こころ』考——E・マクレランの英訳をめぐる——」,「明治大学日本文学」第23号 明治大学日本文学研究会
- 近安里（1996）「『心』のコロケーションに関する一考察——夏目漱石の『こころ』から——」,「明治大学日本文学」第24号 明治大学日本文学研究会
- 齊藤恵子（1990）「二つの KOKORO——マクレラン訳と近藤いね子訳——」,「比較文學研究」第57号 東大比較文学会
- 高島敦子（1973）「夏目漱石と現代人の問題——英文『こころ』研究——」,「青山学院女子短期大学紀要」第27号 青山学院女子短期大学
- 徳永光展（2008）『夏目漱石『心』論』風間書房
- 徳永光展, 小河賢治（2013）「英文・夏目漱石『心』の研究——Meredith McKinney 訳の評価をめぐる——」,「社会環境学」第2巻第1号 社会環境学会
- 徳永光展（2015a）「日英翻訳における時制の処理——夏目漱石『心』の Meredith McKinney による英訳を例として——」,「タイ国日本研究国際シンポジウム2014 論文報告書」チュラーロンコーン大学文学部東洋言語文化学科日本語講座
- 徳永光展（2015b）「夏目漱石『心』英訳にみる日本文化翻訳上の問題点——Meredith McKinney 訳を手がかりに——」*The electronic proceedings of the 4th International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia “State and Non-state Actors in Japan-ASEAN Relations and Beyond”* edited by the Institute of East Asian Studies, Thammasat University.
- 徳永光展（2016a）「夏目漱石『心』英訳で読む「下先生と遺書」——Meredith McKinney 訳の分析——」,「北海道言語文化研究」第14号 北海道言語研究会
- 徳永光展（2016b）「夏目漱石『心』英訳で読む「上先生と私」——Meredith McKinney 訳の分析——」, 李東哲, 権宇, 安勇花主編『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語言文化研究 第4輯』延辺大学出版社
- 徳永光展（2016c）「夏目漱石『心』英訳における話法の処理——Meredith McKinney による翻訳を資料として——」,「日本語日本文学」第45輯 輔仁大学外語学院日本語文学系
- 夏目漱石（1993）『漱石自筆原稿 心』岩波書店
- 夏目漱石（1994）『漱石全集 第9巻』岩波書店
- 北條文緒（2004）『翻訳と異文化——原作とのくずれ』が語るもの——』みすず書房
- 前田尚作（1996）『日英語学研究——漱石著『こゝろ』の英訳に学ぶ——』山口書店
- 丸山和雄（1989）「日英比較表現研究——こころ・Kokoro (PART I) ——」,「立正大学短期大学部紀要」第25号 立正大学短期大学部
- 丸山和雄（1990）「日英比較表現研究——夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART II) ——」,「立正大学短期大学部紀要」第26号 立正大学短期大学部
- 丸山和雄（1991）「日英比較表現研究——夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART III) ——」,「立正大学短期大学部紀要」第28号 立正大学短期大学部